

胡桃三十詰めし袋をほうと持つ

藤田湘子

湘子先生は胡桃が好きだった。食べるだけでなく身近に置き眺めたり、掌で遊ばせたりしたのでだろう。

『藤田湘子全句集』の季語索引によれば、「胡桃」の句が二十一句。十一冊の句集の中で、昭和六十年の句を纏めた『黒』以外、すべての句集に胡桃が詠まれている。

六十年以上俳句を詠んでいたわけだから季語の嗜好に偏りが出るのは当たり前なのだが、何かそこに俳人格のようなものが伺えて楽しい。

戦後、何度か食用や運動用に胡桃がブームになった。

「胡桃三十詰めし袋」とは、外国産の大粒の胡桃だろうか。少し贅沢をして胡桃を買い求め、金属製のくるみ割り器でささやかな愉悦に浸ったのである。